

「京大生らしさ」と京大生の自己認識

令和 2 年度卒

義村聡志

目次

0 はじめに.....	1
1 序論.....	2
1-1 アイデンティティ.....	2
1-2 集団とアイデンティティ.....	3
1-3 大学と個人.....	3
1-4 京都大学のステレオタイプ.....	5
1-5 先行研究.....	5
1-6 仮説.....	6
2 方法.....	8
2-1 データ.....	8
2-2 「京大生らしさ」の尺度の構成.....	8
2-3 質問紙の形式.....	9
3 結果.....	10
3-1 回答者の属性.....	10
3-2 京大生ステレオタイプの明確化.....	12
3-3 「京大生イメージ」と「自己イメージ」との得点の差.....	14
3-4 肯定的特徴と否定的特徴における「京大生イメージ」と「自己イメージ」.....	16
3-5 「学年」と「集団への同一視」の関係.....	17
3-6 その他属性における差異.....	20
4 考察.....	22
4-1 「京大生ステレオタイプ」と本当の京大生.....	22
4-2 仮説1の検証.....	23
4-3 仮説2の検証.....	24
4-4 仮説3の検証とその他属性について.....	26
5 まとめ.....	27
6 参考文献.....	28

0 はじめに

「えーそれでは所属大学と自己紹介をお願いします。」、「えー皆さん、所属大学は言わずに自己紹介をお願いします。」、就職活動をするなかで面接官からの指示は2パターンあった。集団の中の「自分」、個人としての「自分」。「自分」とは何だろうか。学部3回生、4回生と次第に社会に出て働くという時期が近づき、この問いかけに対して何度も考える機会があった。そして面接のたびに自分の所属する大学名やその大学で何を学んだかが問われる。私という人間がみられる中で、必ず自分の所属する組織やその中における役割が質問の対象になる。そして私は時には京大生としての特徴を自分の特徴のように話し、時には京大生としては相いれない特徴を自分の特徴として話した。私の返答に対してしばしば面接官から、「君は京大生らしいね」や「君は京大生らしくないね」などの感想を受ける。自分という人間は、京大生だから自分という人間なのか、自分という人間だから京大生なのか、はたまた、そのような関連性など何もなく、たまたま自分が京大という組織に所属しているのか。そのような思考を続ける中で、「個人」と「集団」との関連性に興味を持ち、研究をしてみたいと考えた。そこで、自分の所属する集団の中でも、「京都大学」という、身近であり、かつ、ある一定の規模を持ち、研究対象としても意味を持ちそうな集団と、そこに所属する個人を対象にして、アイデンティティやステレオタイプ、集団への認識、自己認識についての研究を進めたいと思った。

要旨として述べておくと、この論文では、「頭が良い」とか、「個性的である」、「自由である」というステレオタイプ的な見方をされることが多い京大生を対象にして、

- ① 明確な「京大生ステレオタイプ」を設定し、
- ② そのステレオタイプに対し当の京大生である「個人」は、「一般の京大生」をどのように認識していて、
- ③ 「自分自身」をどう認識しているのかを調べる。

という三つの観点から京大という集団に対するステレオタイプと集団に所属することによる「京大生」的なアイデンティティや「自分自身」のアイデンティティについてどのような関係があるのかを明らかにしたい。

1 序論

1-1 アイデンティティ

アイデンティティとはなんであろうか。矢田部（2012）はアイデンティティとは他から区別されたひとまとまりの自分というものが存在していることを表す言葉であると述べている。そして矢田部曰く「自分とは何だろうか」というアイデンティティの探求は自分の居場所がはっきりと規定されている時にはなかなか生まれないという。私が就職活動を通して「自分」とは何かについて考えるようになったのもこれまでの大学や部活動といった所属の後ろ盾の無い新しいステージに進まざるを得なくなり、自分の存在証明をしなければならなくなったからである。そして私は就活という場において「京都大学」という所属を共有しない多くの人たちと出会い、自分の存在証明を「京大生でない」他者と比較して「京大生であること」に求めたのである。このようにアイデンティティとは他者との関係において成立するものだと言部は述べる。しかし、私は「京大生であること」だけで「自分」とは何かに対する問いを見つけられたような気がしなかった。そして私はさらに「京大生」を他者として認識してその関係の中で自分を位置づけようと「京大生らしくない自分」も探し始めたのである。こうして見つかる「京大生らしくない自分」もまた「京大生」という他者との関係で成り立つアイデンティティのうちの1つである。こうしたように我々は様々なカテゴリーを有してそのカテゴリーごとに他者との関係が存在し、その関係の中に自分を位置づけようとする中でアイデンティティは生まれる。矢田部はその著書の中で、「本当の自分」とは、ただあったりなかったりするものではなく、私たちがそれを探し続けることであらしめているものであり、その意味で「本当の自分」は社会的な現象であるということを述べている。また、大屋（2012）も「自己認識や自己イメージは、他者の反応を鏡に映った自己の様子として解釈することを通じて知ることができるのであり、自我とはまさに社会的に形成される」ものだと言部は述べている。

この論文においては、社会的な現象として他者との様々な関係のなかで生まれるアイデンティティについて、京都大学の学生にとってのアイデンティティのなかでも、「京大生」という一部に焦点をあててこれから議論を進めていくことにする。

1-2 集団とアイデンティティ

誰しも自分がある集団に属していることを認知したことがあると思う。ある人にとってそれは「家族」かもしれないし、「会社」かもしれないし、「学校」であるかもしれない。個人が集団に所属することによる自己認識について、池上（1997）がいうには「自分は〇〇集団の一員である」という認知が、自らのアイデンティティを確認し自尊心を維持するうえで重要な心的基盤をなすようになると述べている。山下（2012）も同様に、ある集団や社会カテゴリーへの所属は自身の定義づけを提供し、人々の行動にも強い影響を及ぼしているものだと述べている。実際に上でも述べたように私は、就職活動というものを経験して自分がどのような人間であるかについて考えていた時に、「自分は京大生である」ということをアイデンティティとして考えている側面があった。これらのことはタジフェルらが提起した社会的アイデンティティ理論によるものである。柿本（1997）が言うには、社会的アイデンティティとはアイデンティティのうち集団ないしカテゴリーの成員性が個人のアイデンティティの中に取り込まれた部分である。また池上（2001）によると、人は通常社会的アイデンティティを獲得したいと考えているが、これは、自己の所属している集団（内集団）が他集団（外集団）と比較して、優位であることを確認することによって獲得されるという。つまり、人は自己評価の源泉を所属する集団に求めようとする、というのが社会的アイデンティティ理論である。私は「自分」とは何かを考えている際に、京大生が持つ特性を自分のアイデンティティとして取り込んだのである。京大生であるから自分という人間である、というような所属集団ありきの自己認識があったのだと考えられるであろう。実際、池上（2001）は、日本の学歴社会の構造を指摘し、その構造が助長して、大学生にとっては所属する大学が大学生の社会的アイデンティティになっていると指摘している。

1-3 大学と個人

この調査をするにあたって京大生を研究対象にするのであるが、この節では大学という社会的な集団について考えてみたい。大学という組織と大学生を研究対象にすることのメリットとして、浅井（2011）は一つには、大学生は中学、高校生に比べ自分自身を客観的に捉えることができる発達段階にあること、もう一つは、大学への帰属は、義務教育の小

中学校はもちろん高校と比べて任意であり、個人が主体的に所属を選ぶことができるため帰属意識がみえやすいということ、を述べている。この二つ目のメリットに対し昨今は大学進学率が上昇し、AO 入試や高校からエスカレーター式での大学入学が増え、大学の入学がより一般的に、より簡単になってきているため、「とりあえず大学に行く」といった意見のように、主体的な選択による大学進学割合が低下していることが危惧され得る。池上（2001）もその点については指摘しており、近年学歴競争の拡大によって大学進学にさほど積極的な価値が見出されなくなり、教育内容よりも入試偏差値という極めて一元的なものさしによる、無意味な競争に青年たちが駆り出されているという。その結果、世間的にみて中、上位とみられる大学においてでさえ、社会的アイデンティティの基盤が見出せなくなっている可能性を指摘した。あくまでも主体的に所属を選択した集団においてその集団の特性が社会的アイデンティティへとなりやすいのであって、第二志望、第三志望として入学を決めた集団においてはその集団に対する不本意な所属意識は積極的な社会的アイデンティティの基盤作成につながらないという。そのような意見のあるなかにおいて京都大学という集団はどうであろうか。京都大学へ進学しようとする日本においてもトップクラスに学力試験が難解であるがために、たとえ入試偏差値がものさしとなっていたとしても、多くの人にとってその高いハードルを越えんとする意思が必要となる。そのため、他の大学で調査するよりも、より強い意志をもって所属を望んだ者たちで構成されていると考えられる。つまり、京大生は学歴社会においてその社会的アイデンティティを積極的に得やすい立場にあり、京大生当人もそのことを分かったうえで入学した者たちであると考えられる。また、この理論で考えると東京大学が最も社会的アイデンティティを得やすいと考えられるが、京大生には「个性的である」、「自由である」といった、特殊なステレオタイプを持って語られることも多いため、学力以外の特徴も調査から見えてくるのではないかと考えた。実際、天野・有馬・池田・仙崎（1980）は京都大学の学風として「自由・自主独立」をあげており、当時の教授陣も異口同音に京大の特色としてこのことを口にしていると述べている。このように、はっきりとした特徴を持って語られることの多い京都大学という組織であれば、所属する個人が十分に自己を同一視出来得る集団であると考えられるため、研究対象の集団として申し分ないと判断した。

1-4 京都大学のステレオタイプ

京都大学という組織はノーベル賞受賞者を多く輩出していることや、日本トップクラスの教育機関であることなどから全国的にも知名度のある組織である。それがゆえにステレオタイプを持って語られることが非常に多い。その中でも京大生は「頭が良い」、「自由である」、「個性的である」というステレオタイプは私自身、非常に多く見聞きしてきた。実際、京都大学には先にも述べたように難解な入学試験が設置されているために、学力という価値基準においては、「頭が良い」というステレオタイプは正しいといえるかもしれない。しかし、その一方で、「自由である」や「個性的である」などのステレオタイプは、京都大学の学風として大学自体も自由の学風の紹介や京大変人講座などのセミナーの開催があったり、実際に一部の学生がメディアに取り上げられるような目立った行動を対外的に発信していたりするが、これらは学力のような明確な基準のないままに生まれ、定着したものである。実際に調査してみて京都大学の多くの学生が自身のことをそのステレオタイプに当てはまらなないと考えているのであれば、片桐（2002）のいうように世間による錯誤相関（ある集団のメンバーであることと、ある特性の関連についての錯誤）である可能性もある。つまり、集団ステレオタイプと実際の構成員の認識がずれていることも考えられるのである。これまで京大生ステレオタイプについてはメディアや高校、友人、ときには京大生の口からきいたこともあったが、形を持って調査された研究は見当たらなかった。そのため、この調査においてそのステレオタイプの真偽を確かめ、現在の正しい京大生の特徴をまとめていきたい。

1-5 先行研究

この論文を進めるにあたって、集団と個人の認識についての先行研究として、平井（2000）の論文を参考にした。平井は日本人論でいわれる「日本人らしさ」の認識は「自分自身」と「一般の日本人」の間に差異があるのではないかと考えた。そこで平井は日本人論で述べられる「日本人らしさ」を分析し、まとめ、尺度となる項目を作成し、大学生を調査対象として、「自分自身」と「一般の日本人」の2つの評定対象について、「日本人らしさ」がどのような差異をもって評価されるか、質問紙調査を主として調べた。この調査では結果として、「自分自身」よりも「一般の日本人」の方に、より「日本人らしさ」を認める傾

向がみられたと述べている。また、その差異がみられた理由として、「一般の日本人」の「日本人らしさ」を評価する際には、メディアで取り上げられる姿や実際に出会った特定の人、特定の世代などを参照として評価したためである、ということもこの論文で述べられている。この論文をもとに「京大生らしさ」というものを考えてみると、おそらく「京大生らしさ」もメディアを中心に作られているのではないかと考えられうる。ただし、「日本人らしさ」と違う点は、生まれながらにその集団に属しているのではなく、自らの選択により、京都大学という集団に属しているのである。もしも学生がステレオタイプな見方に対してそれを望んで入学し、所属しているのであれば、「一般の京大生」の姿が「自分自身」の姿と重なると考えられ、そのステレオタイプは錯誤相関ではなく、再生産される集団の特徴をとらえたものであると言えよう。一方、もしも学生が京大ステレオタイプとは関係なく、単に就職に有利とか、自分が勉強したいことを勉強するのに最適、といった理由から京大を選んでいるのなら、京大ステレオタイプは単なるステレオタイプであり、錯誤相関の産物と言えるかもしれない。「一般の京大生」へのイメージと京大生の「自分自身」へのイメージの評価が重ならない場合は、今の京大生に対する誤った認識であり、訂正されるべきものであろう。

1-6 仮説

以上のようにここまでは、アイデンティティそのものや集団におけるアイデンティティ、大学と個人の関係、京大生ステレオタイプ、そして集団への認識と自己認識に関する先行研究を時折私の経験と結びつけながらまとめてきた。それを踏まえてもう一度この論文における主旨を確認すると、この調査では、一般の京大生にあてはまると思われる特徴（「京大生らしさ」）はどのようなであると認識されているか、そしてその特徴が京大生自身は自分についてはどの程度当てはまると考えているか（「自己認識」）の関係性について調べる。

この問いに対して、いくつかの仮説を紹介する。なお2章でも説明は行いが、この調査では、21 項目の「京大生ステレオタイプ案」を基に京大生にアンケート調査を行い、「一般の京大生」についてと「自分自身」について、各項目がどの程度当てはまるかを5段階で回答してもらい、その回答を1点から5点で得点化し（得点の高いほどその特徴が当てはまる）、その得点利用して分析を進めていく。以下では「一般の京大生」と「自分自身」についての回答をそれぞれ「京大生イメージ」と「自己イメージ」として扱うことにする。

仮説1：「京大生イメージ」の方が「自己イメージ」より「京大生ステレオタイプ」にあてはまる。

この仮説は上記の平井（2000）の論文の調査結果に基づくもので、「一般の京大生」を想定するときに、メディアなどに取り上げられやすい特徴的な京大生を想定することでその特徴が誇張された形で認識されるのではないかと考えられるためである。

仮説2：「京大生ステレオタイプ」のうち“肯定的特徴”の方が、“否定的特徴”より自身のアイデンティティに取り込まれやすい。

この仮説は社会的アイデンティティ理論に基づくもので、先にも述べているように池上（2001）によると、自己の所属している集団（内集団）が他集団（外集団）と比較して、優位であることを確認することによって獲得されるものが社会的なアイデンティティになるため、他集団と比べて優位を確認するような肯定的特徴は「自分自身」のアイデンティティになり、劣位を確認するような否定的特徴は「自分自身」のアイデンティティになりにくいのではないかと考えられるからである。

仮説3：学年が上がるごとに「京大生イメージ」と「自己イメージ」が同一視されるようになる。

この仮説は浅井（2011）に基づくものである。彼は自身の研究において、大学生の人間関係の変化と帰属意識を調べ、大学に入学したときには、高校生の友人関係が中心で、大学への帰属意識は薄かったものの、大学生活の年数を重ねるにつれ、大学での人間関係が深まり、帰属意識は変化していた、と述べており、京大生の「自己イメージ」も「京大生イメージ」に染まっていくのではないかと考えられるためである。

2 方法

2-1 データ

京都大学に在学中の学生を対象として、2020 年 10 月 31 日から 2020 年 11 月 8 日までの期間において京大生らしさに関する質問紙調査を行った。質問紙はインターネット上の Google Forms を用いて作成し、SNS アプリの LINE を活用して既存の各京大生コミュニティにおいて拡散し、任意の場所からインターネット上で回答してもらった。なお、回答者は 405 名（男性 232 名、女性 168 名、その他 1 名、性別を回答しなかった人 4 名）であった。

2-2 「京大生らしさ」の尺度の構成

京大生ステレオタイプはメディアで語られているものや、人から伝え聞いたものなどで実際に耳にすることは多いものの、これまでは明確にまとめられてはいなかった。そのため、この論文において京大生ステレオタイプを明確に設定しなおす必要がある。本研究においては、まず所属研究室において京都大学に所属する教授 1 名と院生 1 名、学部生 5 名によってブレインストーミングを行い、京大生ステレオタイプ案を集め、それを以下の 21 個に集約し、京大生ステレオタイプ案とした。

【京大生ステレオタイプ案】

頭が良い・人見知りである・礼儀正しい・ダサい・冷静である・気難しい・裕福である・個性的である・プライドが高い・要領が良い・こだわりが強い・マイペースである・モテない・独創的である・几帳面である・おとなしい・理屈っぽい・熱中するものがある・自由である・才能がある・努力家である

この 21 個の特徴に対して、被験者である京大生にアンケートに答えてもらい、「一般の京大生」はそれぞれの特徴に対して、「あてはまる ややあてはまる どちらでもない あまりあてはまらない あてはまらない」の 5 項目から選択してもらう。「あてはまる」に 5 点、「ややあてはまる」に 4 点、「どちらでもない」に 3 点、「あまりあてはまらない」に 2 点、「あてはまらない」に 1 点の得点を与え、アンケートを集計した平均得点が 3 点以上のものを「京大生ステレオタイプ」であるということにする。

2-3 質問紙の形式

最初に被験者の属性として、問1で「性別」、問2で「学年」、問3で「学部」を選択、記入してもらうようにした。これらの属性が被験者の思う「一般の京大生」と「自分自身」の評定に影響を与えている可能性があるためである。問1の「性別」については「1.男性 2.女性 3.その他 4.回答しない」の選択のうちからいずれかを回答してもらった。問2の「学年」については「1. 1回生 2. 2回生 3. 3回生 4. 4回生 5. 5回生以上」からいずれかを回答してもらった。問3の「学部」については、「1.総合人間学部 2.文学部 3.教育学部 4.法学部 5.経済学部 6.理学部 7.医学部 8.薬学部 9.工学部 10.農学部 その他記述」の選択肢からいずれかを回答してもらった。

次に問4で「一般の京大生」について、問5で「自分自身」について、「京大生らしさ」の尺度案のそれぞれの項目が、どの程度あてはまるかを各項目に対して5段階で評定させた。問4では「『一般の京大生』を想定して、その特徴について以下の項目に答えてください」という問いに続いて、上で示した京大生ステレオタイプ案の項目を示し、それぞれについて「あてはまる・ややあてはまる・どちらでもない・あまりあてはまらない・あてはまらない」の5段階のうちからいずれかを回答してもらった。問5では「『自分自身』を想定して、その特徴について以下の項目に答えてください」という問いに対して問4と同様の手続きをとった。

最後に、問6で問4の「一般の京大生」の評定では誰を想定して回答をしたのかを選択、記入してもらうようにした。具体的には問6では「『一般の京大生』について答える際に、誰を基にして想定しましたか？」という問いに対して、「1.自分自身 2.テレビに映る京大生 3.新聞で語られる京大生 4.YouTube に映る京大生 5.人から伝え聞いた京大生 6.実際の京大生の友人 7.実際の京大生だが友人ではない人 その他記述」の選択肢から複数選択可としたうえで回答してもらった。

なお平井（2000）の研究では「一般の日本人」と「自分自身」の評価を問う際にその問いの順番を入れ替えて、順序効果を考慮して質問紙が用意されていたが、結果分析の際には尺度全体で見たときの平均値で有意な差が認められなかったことから順序効果を考慮しないことにしていた。本研究では平井の研究結果に習って順序効果を最初から考慮せずに、質問紙の問いの順番は一貫したもので調査を行った。

3 結果

3-1 回答者の属性

2 章でも記した通り、今回の調査では現在京都大学に在籍する学生らに調査に協力してもらった。すべての回答にデータの欠損は無く、各属性の度数分布は図 3-1、図 3-2、図 3-3 のようになった。

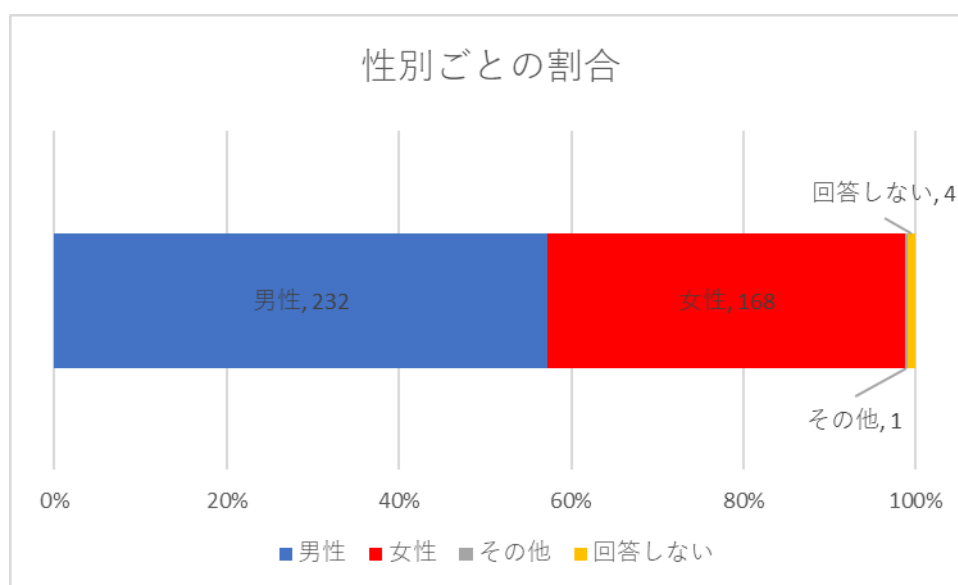


図 3-1：性別

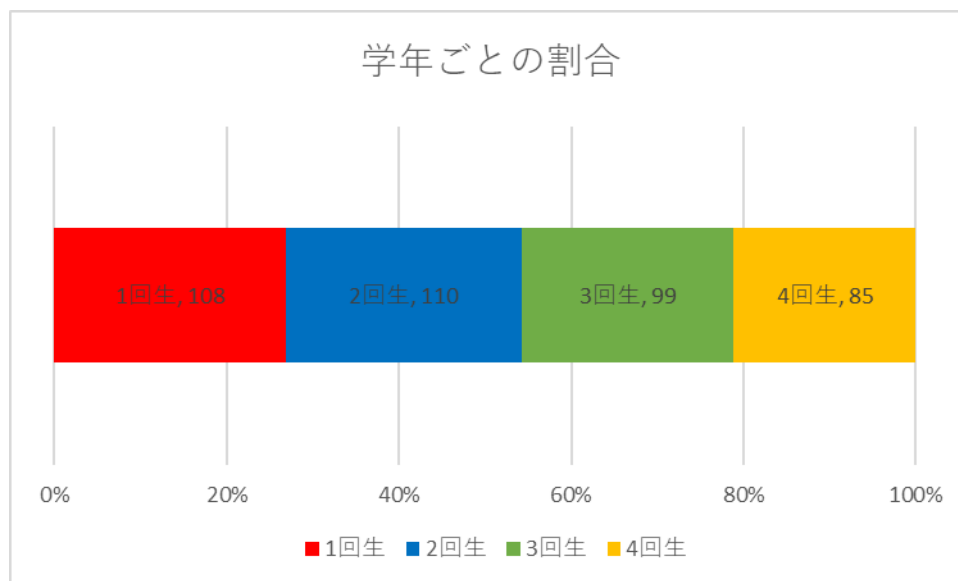


図 3-2：学年

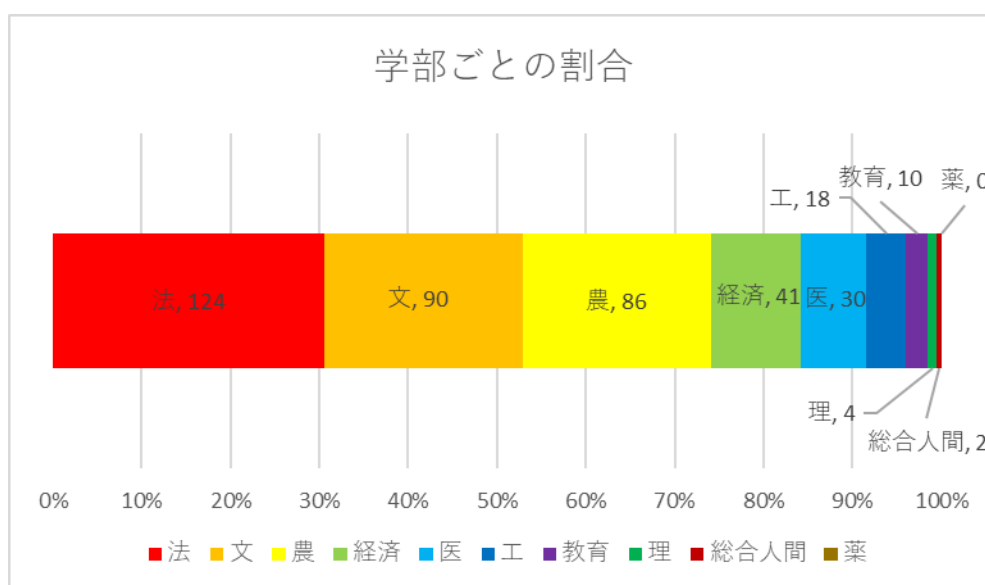


図 3-3：学部

3-2 京大生ステレオタイプの明確化

まずこの調査では2-2にもあるように、「京大生イメージ」の得点を利用して、これまで存在はしていたものの、はっきりとしたものが存在していなかった「京大生らしさ」を明確にし、それを「京大生ステレオタイプ」として作成する。各項目における「京大生イメージ」の平均値を得点の高いものから順に並べると表3-1のようになった。この結果によると「京大生ステレオタイプ案」の中で「几帳面である」の項目のみ平均値が2.89点となり3点以下であり、「京大生ステレオタイプ」とは認められなかった。他の項目は全て3点以上であったためにこの論文においては「京大生ステレオタイプ」であるとして扱っていくことにする。

次にこの確定された「京大生ステレオタイプ」はどのように形成されているのかを質問紙の問6の結果を交えながら見ていく(図3-4)。図3-4より、「京大生ステレオタイプ」はテレビや新聞、YouTubeなどのメディアによるというアンケート結果もちろん一定数あったが、「自分自身」や「実際の京大生」といった実在人物を想定して回答されていることが比較的多いことが分かった。実際の京大生を調査対象者としたためにこのようになったと考えられる。主に実在人物を想定して形成された「京大生ステレオタイプ」はステレオタイプの中でも実際の京大生の特徴をとらえたステレオタイプであるといえるだろう。特に表3-1で分かるように「頭が良い」、「個性的である」、「こだわりが強い」、「熱中するものがある」、「理屈っぽい」、「自由である」、「プライドが高い」、「マイペースである」、「才能がある」、「努力家である」の10項目は「一般の京大生」の評定において平均点が4点前後であり、強い「京大生ステレオタイプ」であるといえる。今回明確化した20項目の特徴は実際にこれまで各所で耳にしてきたステレオタイプとほぼ同じであり、世間で語られる「京大生ステレオタイプ」と京大生の思う「京大生ステレオタイプ」は大きく変わったものではなかったといえるであろう。以下、「京大生ステレオタイプ」として、今回の調査で認められた20項目を活用していく。

表 3 - 1 : 各項目における「京大生イメージ」の平均値

	平均値	(SD)	(SE)
頭が良い	4.66	(0.57)	(0.03)
個性的である	4.26	(0.84)	(0.04)
こだわりが強い	4.12	(0.82)	(0.04)
熱中するものがある	4.06	(0.89)	(0.04)
理屈っぽい	4.03	(0.85)	(0.04)
自由である	4.01	(0.95)	(0.05)
プライドが高い	4.01	(0.92)	(0.05)
マイペースである	3.98	(0.87)	(0.04)
才能がある	3.98	(0.86)	(0.04)
努力家である	3.91	(0.89)	(0.04)
独創的である	3.89	(0.91)	(0.05)
要領が良い	3.78	(0.97)	(0.05)
ダサい	3.68	(0.92)	(0.05)
裕福である	3.64	(0.94)	(0.05)
モテない	3.48	(0.99)	(0.05)
冷静である	3.46	(0.97)	(0.05)
気難しい	3.41	(1.02)	(0.05)
人見知りである	3.40	(0.92)	(0.05)
おとなしい	3.24	(0.98)	(0.05)
礼儀正しい	3.17	(0.92)	(0.05)
几帳面である	2.89	(0.93)	(0.05)

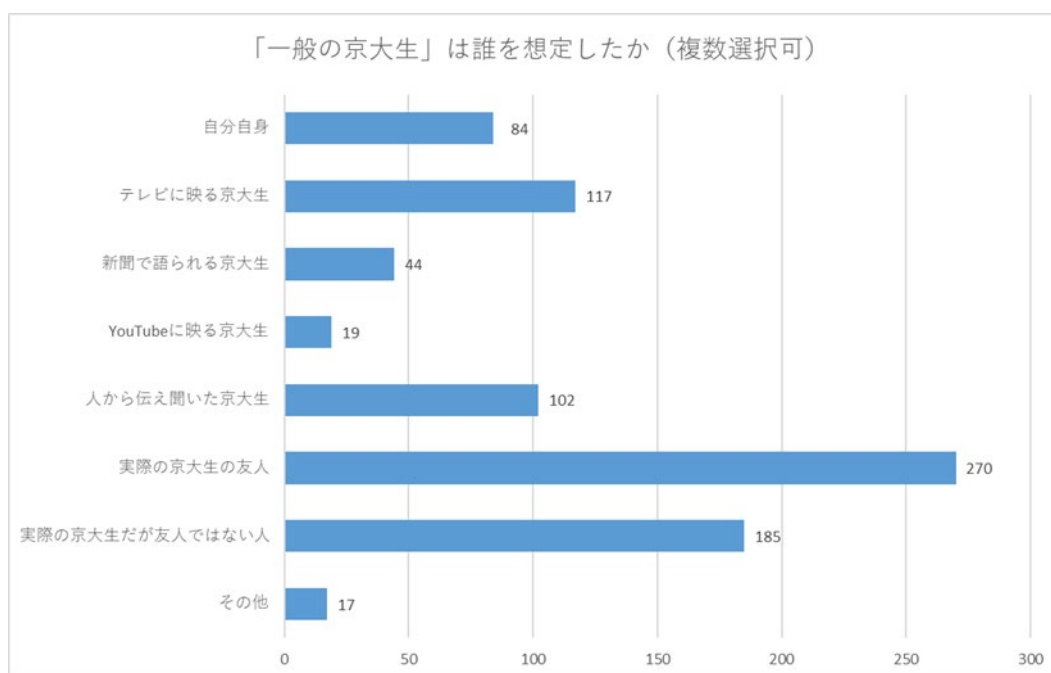


図 3-4：「一般の京大生」の想定

3-3 「京大生イメージ」と「自己イメージ」との得点の差

ここでは仮説 1 に基づいて「京大生イメージ」と「自己イメージ」の評定の結果をまとめる。まず各回答者に関して 3-2 で「京大生ステレオタイプ」と認められた 20 項目の「京大生イメージ」の平均点を計算し、それを「京大生イメージ得点」と名付けた。「自己イメージ」に関しても同様に 20 項目の平均値を計算し、それを「自己イメージ得点」と名付けた。これらの得点のすべての回答者の平均値は「京大生イメージ得点」が 3.81 (SD=0.38)、「自己イメージ得点」が 3.36 (SD=0.40) であり、t 検定の結果 $p=0.00$ となり、2 つの評定の間には有意な差があることが認められた。すなわち、「京大生ステレオタイプ」の項目全体としてみると「京大生イメージ得点」の方が「自己イメージ得点」より有意に大きく、「京大生イメージ」の方が「自己イメージ」より「京大生ステレオタイプ」にあてはまるとした仮説 1 は支持されたといえる。

次にどのような項目で「京大生イメージ」と「自己イメージ」の 2 つの評定における差があったのかを調べるために、項目ごとに平均値の差の検定を行い、結果をまとめた（表 3-2）。有意な差が認められなかった項目は、「人見知りである」、「マイペースである」、「お

となしい」の3項目のみであった。また、有意差が認められた項目の中で「自己イメージ」の方が「京大生イメージ」よりも得点が高かったもの、すなわち仮説1と逆の結果が認められたものは「礼儀正しい」、「モテない」の2項目のみであった。「京大生ステレオタイプ」として認められた全20項目の中で、有意な差がなかった3項目と「自己イメージ」の方が得点の高かった2項目を合わせた5項目以外の15項目（表3-2でグレーに網掛けされた項目）は「京大生イメージ」方が「自己イメージ」よりも得点が高く、より「京大生ステレオタイプ」を認めたことを示している。

表3-2:「京大生イメージ」と「自己イメージ」についての各項目と平均値の比較

		京大生イメージ	(SD)	(SE)		自己イメージ	(SD)	(SE)	平均値の差	(SD)	(SE)	t 値	p 値
肯定	頭が良い	4.66	(0.57)	(0.03)	>	3.29	(1.10)	(0.05)	1.37	(1.21)	(0.06)	22.81	0.00
	熱中するものがある	4.06	(0.89)	(0.04)	>	3.86	(1.17)	(0.06)	0.20	(1.45)	(0.07)	2.77	0.01
	才能がある	3.98	(0.86)	(0.04)	>	2.69	(1.10)	(0.05)	1.28	(1.31)	(0.07)	19.68	0.00
	努力家である	3.91	(0.89)	(0.04)	>	3.47	(1.19)	(0.06)	0.44	(1.31)	(0.07)	6.81	0.00
	独創的である	3.89	(0.91)	(0.05)	>	2.77	(1.20)	(0.06)	1.11	(1.44)	(0.07)	15.59	0.00
	要領が良い	3.78	(0.97)	(0.05)	>	2.84	(1.20)	(0.06)	0.94	(1.47)	(0.07)	12.87	0.00
	冷静である	3.46	(0.97)	(0.05)	>	3.31	(1.11)	(0.06)	0.15	(1.44)	(0.07)	2.14	0.03
否定	礼儀正しい	3.17	(0.92)	(0.05)	<	3.97	(0.87)	(0.04)	-0.80	(1.16)	(0.06)	-13.86	0.00
	理屈っぽい	4.03	(0.85)	(0.04)	>	3.30	(1.18)	(0.06)	0.73	(1.40)	(0.07)	10.50	0.00
	プライドが高い	4.01	(0.92)	(0.05)	>	3.68	(1.07)	(0.05)	0.33	(1.24)	(0.06)	5.36	0.00
	ダサい	3.68	(0.92)	(0.05)	>	3.30	(1.05)	(0.05)	0.38	(1.41)	(0.07)	5.38	0.00
	モテない	3.48	(0.99)	(0.05)	<	3.69	(1.13)	(0.06)	-0.21	(1.43)	(0.07)	-2.92	0.00
	気難しい	3.41	(1.02)	(0.05)	>	2.78	(1.23)	(0.06)	0.62	(1.48)	(0.07)	8.50	0.00
どちらでもない	人見知りである	3.40	(0.92)	(0.05)	<	3.40	(1.33)	(0.07)	-0.01	(1.56)	(0.08)	-0.10	0.92
	個性的である	4.26	(0.84)	(0.04)	>	3.18	(1.12)	(0.06)	1.08	(1.33)	(0.07)	16.44	0.00
	こだわりが強い	4.12	(0.82)	(0.04)	>	3.62	(1.13)	(0.06)	0.50	(1.30)	(0.06)	7.68	0.00
	自由である	4.01	(0.95)	(0.05)	>	3.74	(1.08)	(0.05)	0.28	(1.26)	(0.06)	4.45	0.00
	マイペースである	3.98	(0.87)	(0.04)	>	3.93	(1.06)	(0.05)	0.05	(1.22)	(0.06)	0.82	0.42
	裕福である	3.64	(0.94)	(0.05)	>	3.18	(1.06)	(0.05)	0.46	(1.34)	(0.07)	6.95	0.00
	おとなしい	3.24	(0.98)	(0.05)	>	3.24	(1.24)	(0.06)	0.00	(1.50)	(0.07)	0.07	0.95
	全項目における平均	3.81	(0.39)	(0.02)	>	3.36	0.40	0.02	0.45	(0.54)	(0.03)	16.57	0.00

3-4 肯定的特徴と否定的特徴における「京大生イメージ」と「自己イメージ」

ここでは仮説2の検証のために算出したデータについて記していく。最初に、表3-2で示されているように「京大生ステレオタイプ」として認められた全20項目を“肯定的特徴”、“否定的特徴”、“どちらでもない特徴”の3つに分類した。20項目の中でも「裕福である」のように字義通りに解釈すれば肯定的であると考えられるものがあるが、皮肉として否定的な意味をもって述べられたり、解釈されたりすることもあるため、“どちらでもない特徴”として分類することにした。また、“どちらでもない特徴”に分類された項目群は解釈の仕方によって分析結果も変わってしまうため対象から除外し、肯定と否定の2群を分析の対象とした。“肯定的特徴”8項目、“否定的特徴”6項目を回答者ごとに平均得点化して図示したのが図3-5である。

仮説2の分析にあたっては回答者ごとに肯定・否定それぞれの特徴において「京大生イメージ」の平均点から「自己イメージ」の平均点を引いた得点を「非アイデンティティ化度」と名付けて扱っていく。肯定・否定のどちらの特徴においても「非アイデンティティ化度」の値が小さいほどその特徴が自己認識の中でアイデンティティ化が進んでおり、大きいほどアイデンティティ化が進んでいないことになる。なお補足すると、仮説1の結果を踏まえた前提として、「京大生イメージ」の得点の方が「自己イメージ」の得点よりも大きいと考えられるため「非アイデンティティ化度」は各個人においては正の値をとるケースが多いと予想される。もし、回答者によって「非アイデンティティ化度」が負の値をとる場合も、その場合は負の値をとった特徴が「京大生イメージ」を超えて「自己イメージ」として過度にアイデンティティ化されているということであり仮説2の検証には問題がない。そのため「非アイデンティティ化度」は絶対値を含まない変数である。

少々複雑になってきたため、ここで仮説2をもう一度確認すると、仮説2では社会的アイデンティティ理論を根拠に、自らの所属する集団の優位性を、より自尊心として自己アイデンティティ化するのではないかと考え、「京大生ステレオタイプ」のうち“肯定的特徴”の方が、“否定的特徴”より自身のアイデンティティに取り込まれやすい、とした。この仮説2が支持されるには“肯定的特徴”の方が“否定的特徴”よりも「非アイデンティティ化度」の平均値が有意に小さければ良いということになる。

以上を踏まえて分析結果をみると、「非アイデンティティ化度」の平均値は“肯定的特徴”で0.59 (SD=0.74)、“否定的特徴”で0.31 (SD=0.93)であり、検定により $p=0.00$ であったため、その差は有意であることが分かった (表3-3)。つまり、“肯定的特徴”の方

が“否定的特徴”よりも「非アイデンティティ化度」の値が大きく、『「京大生ステレオタイプ」のうち“否定的特徴”の方が、“肯定的特徴”より自身のアイデンティティに取り込まれやすい』という結果になった。よって仮説2は支持されず、むしろ仮説2とは真逆の内容が支持されるということになった。

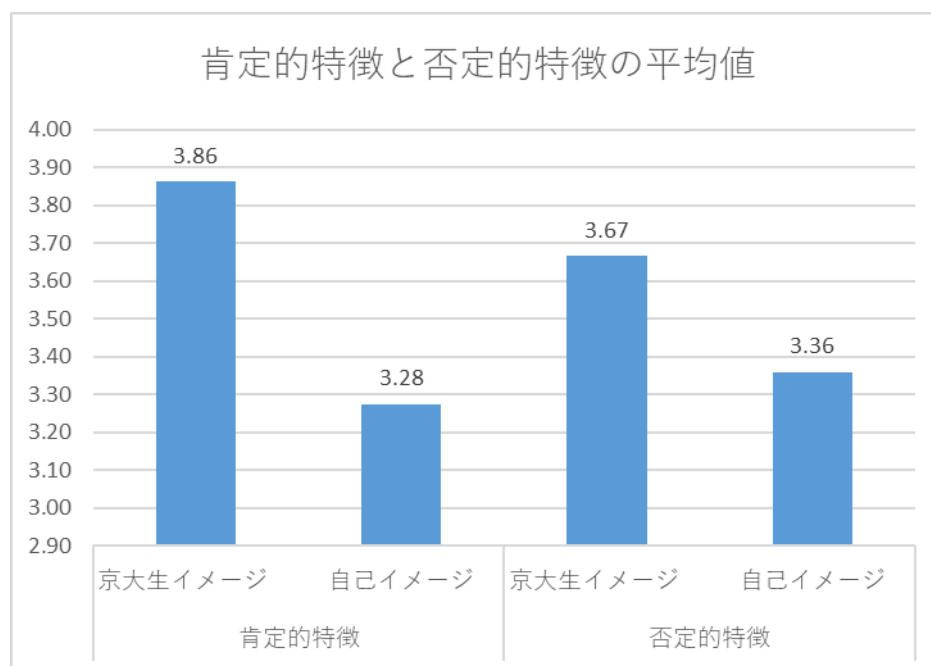


図 3-5：肯定的特徴と否定的特徴の平均値

表 3-3：「非アイデンティティ化度」の肯定的特徴と否定的特徴の評価比較

	肯定的特徴				否定的特徴			t 値	p 値
	(SD)	(SE)			(SD)	(SE)			
非アイデンティティ化度	0.59	(0.74)	(0.04)	>	0.31	(0.93)	(0.05)	4.77	0.00

3-5 「学年」と「集団への同一視」の関係

この節では、仮説3に基づいて学年が上がるとともに集団への同一視が進むのかを検討する。3-1でも示したように今回の調査は学年ごとに、学部1回生108名、2回生110名、3回生99名、4回生85名、5回生以上3名から回答を得た。5回生以上の回答者数は他の学年のサンプル数と比べて極端に少ないので学年ごとに分析を進めるこのパートにお

いては不十分であるので除外して考えることにする。回答の結果、学年ごとの得点は表 3-4 のようになった。

この調査では直接的に集団への同一視度合いを測るような設問を用意しているわけではない。そのため、まず回答者がどの程度「京大生イメージ」に「自己イメージ」を同一視しているのかを調べるために、各回答者に関して「京大生イメージ得点」と「自己イメージ得点」の差の絶対値を計算し、「京大生イメージ」と「自己イメージ」の認識がどれくらい乖離しているのかを示す「非同一視度」という新たな変数を作った。「非同一視度」の値が大きいほど、回答者は「京大生イメージ」を「自己イメージ」と区別していることになる。そのため、仮説 3 が支持されるには学年が上がるにつれて「非同一視度」の値が小さくなり、かつそれが有意であることが条件である。

それを踏まえて「非同一視度」の学年ごとの分析結果をみると、表 3-5、図 3-6 のようになった。そして学年の経過とともに「非同一視度」がどのように変化するかを調べるために、「非同一視度」を従属変数、「学年」を独立変数とし、統制変数として「性別」を独立変数に加えて重回帰分析を行った。なお、「性別」を統制変数にするにあたって、「性別ダミー」（男性→0、女性→1）を作成した。また、質問紙の「性別」の欄において「その他」を選択した 1 名と、「回答しない」を選択した 4 名、合計 5 名の回答者はこの分析では除いた。その結果、表 3-6、表 3-7 のようになり、「学年」、「性別」とともに $p < 0.01$ （表 3-7 では「学年」の p 値は小数点以下第三位四捨五入のため $p = 0.01$ と表記）で有意となり、「学年」が一つ上がるにつれてわずかではあるが「非同一視度」が小さくなり、男性よりも女性の方が「非同一視度」が高くなるという結果になった。よって学年が上がるごとに「京大生イメージ」と「自己イメージ」が同一視されるようになる、ということになり、仮説 3 は支持された。

表 3-4：学年ごとの「京大生イメージ得点」と「自己イメージ得点」の平均値

学年	京大生イメージ	(SD)	自己イメージ	(SD)	度数
1回生	3.84	(0.42)	3.31	(0.42)	108
2回生	3.84	(0.39)	3.37	(0.40)	110
3回生	3.79	(0.37)	3.41	(0.42)	99
4回生	3.76	(0.36)	3.34	(0.36)	85

表 3-5：学年ごとの非同一視度

学年	平均値	(SD)	度数
1回生	0.60	(0.49)	108
2回生	0.59	(0.45)	110
3回生	0.50	(0.39)	99
4回生	0.48	(0.36)	85

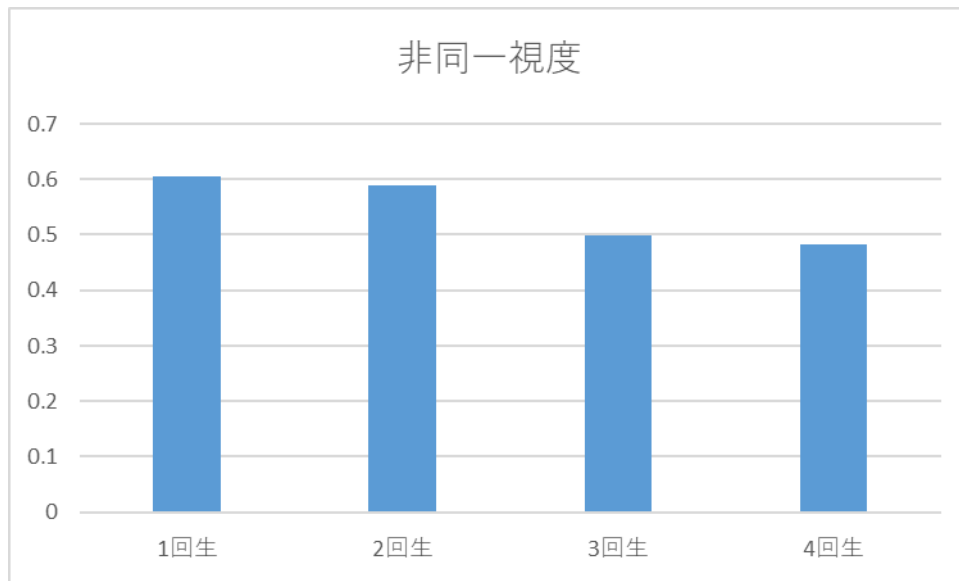


図 3-6：学年ごとの非同一視度

表 3-6：各変数の平均値

	平均値	(S D)
非同一視度	0.55	(0.43)
性別(女性 = 1)	0.42	(0.49)
学年	2.40	(1.10)
度数	397	

表 3-7:「非同一視度」に対する重回帰分析の結果

	偏回帰係数	(S E)	標準偏回帰係数	t値	p 値
学年	-0.05	(0.02)	-0.14	-2.72	0.01
性別 (女性)	0.14	(0.04)	0.16	3.20	0.00
定数	0.62	(0.05)		11.74	0.00
調整済み R ²			0.03		
度数			397		

3-6 その他属性における差異

これまでは、この論文の主旨に基づき、「京大生」という統一された属性を基にして分析を行ってきた。また 3-5 では仮説 3 に基づいて、「京大生」の中の「学年」という属性に着目して分析を行い、その過程で「性別」が分析結果に影響を及ぼすことが分かった。この節では、「京大生」という属性の中でも割と大きな属性である「性別」と「学部」に着目して、仮説にこれらの属性が影響を与えているのかを調べていく。

まず、「性別」に着目してみる。質問紙の問 1 で「回答しない」を選択した 4 名とサンプル数が少なかった「その他」を選択した 1 名を除き、「男性」232 名と「女性」168 名で分析を行った。男性と女性とで「京大生イメージ得点」の平均値を比べると、 $p = 0.41 > 0.05$ であり、男女の間に有意な差がみられなかった。一方、「自己イメージ得点」の平均値の差を比べると $p < 0.01$ となり、男女の差は有意であった (表 3-8)。「自己イメージ」の評定で男女の回答の差が有意であったため「性別」による違いが、仮説の分析結果に影響を与えている可能性があった。そのため、それぞれの仮説において性別ごとで検証をしてみた。その結果、3-3、3-4 での全体での結果と同様に、男女ともに仮説 1 は支持され (表 3-9)、男女ともに仮説 2 とは反対の内容が支持された (表 3-10)。なお、仮説 3 に関しては 3-5 で示したように「性別」が「非同一視度」に影響を与えているが、「学年」と「性別」の間に共線性は見られなかったために仮説の検証結果には影響を与えていなかった。以上より、「性別」によって回答差はみられたが、それによって仮説の検証結果が変わることはないと分かった。

次に「学部」について調べてみる。今回の調査における回答者は、総合人間学部 2 名、

文学部 90 名、教育学部 10 名、法学部 124 名、経済学部 41 名、理学部 4 名、医学部 30 名、薬学部 0 名、工学部 18 名、農学部 86 名であった。学部ごとの「京大生イメージ得点」の平均値と「自己イメージ得点」の平均値のそれぞれにおいて、学部間で回答に有意な差があるかを調べるために分散分析を行ったが有意な差はみられなかった。また、文系学部、理系学部の二つに分けて（総合人間学部、教育学部は専攻内容のばらつきや入試科目の観点から文理分けが難しかったため除外）、「京大生イメージ得点」の平均値と「自己イメージ得点」の平均値のそれぞれにおいて平均値の差の検定を行ったがこれも 2 群の間に有意な差はみられなかった。つまり、「学部」による回答差が認められず、「学部」が今回の調査の結果に影響を与えていないということが分かった。

表 3-8:「京大生イメージ得点」と「自己イメージ得点」の男女比較

	男性	(SD)	(SE)		女性	(SD)	(SE)	t 値	p 値
京大生イメージ	3.82	(0.41)	(0.03)	>	3.79	(0.37)	(0.03)	0.82	0.41
自己イメージ	3.46	(0.39)	(0.03)	>	3.22	(0.38)	(0.03)	6.30	0.00

表 3-9: 男女別の「京大生イメージ得点」と「自己イメージ得点」の比較

	京大生イメージ	(SD)	(SE)		自己イメージ	(SD)	(SE)	度数	t 値	p 値
男性	3.82	(0.41)	(0.03)	>	3.46	(0.39)	(0.03)	232	10.10	0.00
女性	3.79	(0.37)	(0.03)	>	3.22	(0.38)	(0.03)	168	14.07	0.00

表 3-10

男女別「非アイデンティティ化度」の値の肯定的特徴と否定的特徴の評価比較

	肯定的特徴	(SD)	(SE)		否定的特徴	(SD)	(SE)	度数	t 値	p 値
男性	0.45	(0.72)	(0.05)	>	0.29	(0.94)	(0.06)	232	2.08	0.04
女性	0.78	(0.72)	(0.06)	>	0.35	(0.91)	(0.07)	168	4.65	0.00

4 考察

今研究においては、3章の通り、3-2で「京大生ステレオタイプ」が確定し、3-3で仮説1が支持され、3-4で仮説2とは反対の内容が支持され、3-5で仮説3が支持されるという結果になった。それを踏まえてそれぞれの結果の考察などをこの4章ではまとめていくことにする。

4-1 「京大生ステレオタイプ」と本当の京大生

今回の調査では事前に用意した全21項目の「京大生ステレオタイプ案」から、回答者が「一般の京大生」に対して少しでもあてはまると考えたものを「京大生ステレオタイプ」として確定させた。その結果、「几帳面である」を除いた20項目が「京大生ステレオタイプ」として認められたということになった。

では京大生は「京大生ステレオタイプ」は「自分自身」に当てはまっていると考えているのであろうか。以下、表3-2の「自分自身」の各項目の得点を基に考察を進めていく。

「京大生ステレオタイプ」を確定させた方法と同じ手順で平均値が3点以上のものを「京大生自己認識」とすると、「気難しい」が2.78点、「要領が良い」が2.84点、「独創的である」が2.77点、「才能がある」が2.69点であり、全21項目中この4項目の特徴は「京大生自己認識」としては認められず、残りの17項目は平均値が3点以上で「京大生自己認識」として認められた。3-2での結果と合わせて、「京大生ステレオタイプ」かつ「京大生自己認識」でもある項目は16項目である。時にステレオタイプは自己の認識との齟齬があり、時に自己認識は他人から見たときに全く違ってとらえられることがあるが、今回の調査で示されたこの16項目の特徴は「京大生ステレオタイプ」と「自己認識」の評価が重なった、適切に「京大生をとらえた特徴」として認められたものだといえるであろう（表4-2）。

表 4-2：「京大生をとらえた特徴」

頭が良い	人見知りである	礼儀正しい
ダサイ	冷静である	裕福である
個性的である	プライドが高い	こだわりが強い
マイペースである	モテない	おとなしい
理屈っぽい	熱中するものがある	自由である
努力家である		

4-2 仮説 1 の検証

3-3 から分かるように今回の調査の結果、項目全体でみると調査対象である京大生は「自己イメージ」よりも「京大生イメージ」の方に「京大生ステレオタイプ」を強く認めたことが分かり、仮説 1 は支持された。「一般の京大生」を想定する際にはテレビや新聞、YouTube などのメディアを参照とした人が一定数いる一方で半数以上の方が実際の京大生を参照として回答を行っていた。メディアでも、実際の京大生でも、もしありのままで京大生を認識することができていたら「京大生イメージ」の平均値と「自己イメージ」の平均値はほぼ等しくなるはずである。これまで語られてくるが多かったようにメディアを通じてステレオタイプ的な見方が広がるのはもちろんであるが、実物を目にする際でも我々はステレオタイプの枠組みに当てはめて人を見ているといえるのではないだろうか。

次に表 3-2 の平均値の差の欄を参照に、項目ごとにみると、「頭が良い」、「個性的である」、「要領が良い」、「独創的である」、「才能がある」の項目は「京大生イメージ」と「自己イメージ」の平均値の差が約 1 点あり、「京大生イメージ」の方が「自己イメージ」よりも強くあてはまると評価されている。これらは京大生が集団の特徴と自己アイデンティティとの間に大きなギャップを抱えている項目であるといえるだろう。

またそのほかで興味深いのが、仮説とは逆の結果が示された「礼儀正しい」と「モテない」の 2 項目である。仮説と逆というのは、京大生は自分の方が「一般の京大生」より礼儀正しいと認識し、自分は「一般の京大生」よりモテないと認識しているということである。

「礼儀正しい」に関しては「京大生イメージ」平均値が 3.17 点、「自己イメージ」の平均値が 3.97 点であり、「京大生イメージ」の得点が低いというよりはむしろ「自己イメージ」の得点が他の項目と比べても高い。京大生自身は礼儀良く振舞っているつもりではあるが、

少なくともステレオタイプとしては並み程度の礼儀でしかないということを意味する結果であろう。本来正装で臨むべき卒業式では仮装パーティーのような格好で参加している集団があったり、学園祭ではゲリラ的に集団で現れパンツ一丁で踊りだす集団があったりとその感覚のズレのようなものは京大生として生活していると時折感じられるものである。

「一般の京大生」について回答する際、回答者達もこの考察で述べたような京大生の様子を思い浮かべたのかもしれない。また、「モテない」という特徴に関しては「京大生イメージ」の平均値が 3.48 点、「自己イメージ」の平均値が 3.69 点であり、「自己イメージ」の得点がこれもまたやや高い。以前に「さんまの東大方程式」というバラエティー番組で放送されていた京大生の悩みランキングで第 1 位であったのがまさに「モテない」であった。メディアで大きく取り上げられた「モテない」という悩みではあるが、誇張されたイメージではなく、実際に京大生は「自分自身」の悩みとして「一般の京大生」以上に悩ましく思っていることであるのかもしれない。

4-3 仮説 2 の検証

3-4 の仮説 2 の分析においては「京大生ステレオタイプ」を“肯定的特徴”と“否定的特徴”に分類し、各回答者の「非アイデンティティ化度」の平均値を、“肯定的特徴”と“否定的特徴”の 2 群間で比較した。その結果、“肯定的特徴”の方が“否定的特徴”よりも「非アイデンティティ化度」の値が有意に大きいという結果になった。つまり、「京大生ステレオタイプ」のうち、優位を示す“肯定的特徴”より、劣位を示す“否定的特徴”の方が自己アイデンティティになっており、人は優位的な自己評価の源泉を所属する集団に求めようとするという“社会的アイデンティティ理論”に当てはまらない結果が出たということである。学歴社会の日本において十分な社会的アイデンティティを得られるであろう京大生の自己認識はなぜこのようになったのだろうか。

1 つ目に、日本人的な卑下や謙遜の精神が働いたと考えられる。確かに卑下や謙遜というものは、日本で生活していればその使用頻度は計り知れず、自然と身についてしまっているもおかしうはない。しかし、この調査は Google Forms を利用した WEB 調査であり、体裁を気にして回答する必要がないということを考えると、この考察では不十分のように思われる。

2 つ目がこの結果そのものが京大生の特性であるという考えである。この傾向とよく似たものが見つからないかと調べてみるとインポスター現象というものが見つかった。インポスター現象というのは「学問的・専門分野において、客観的に成功しているという証拠があるにも関わらず、本人は虚無感や無価値観を抱き、知的な面で他者を欺いていると感じる内的経験」であると Clance (1985) はいう。つまり、他人からみて凄いと思われるような特徴（肯定的特徴）を持った人が自らのことを過少評価するのである。またこのインポスター現象は男女ともに現れるものであるが、女性の方が強く表れやすいということも述べられている (Clance & Imes 1978)。そのため「京大生ステレオタイプ」の“肯定的特徴”における「非アイデンティティ化度」の男女の平均値の差を検定してみたところ、女性の方が男性よりも「非アイデンティティ化度」の値が大きく、 $p = 0.00 < 0.01$ であり、その差も有意であった（“否定的特徴”においては平均値に有意な差はみられなかった）。よって女性の方が肯定的特徴において周りと比べて自身のことを過少評価しているということになり、インポスター現象的な特徴が表れていることが分かった（表 4-3）。さらに、藤江（2009）はインポスター現象を経験しやすい人の特徴として、「自分の能力に自信を持ってないこと」を挙げているが、“肯定的特徴”の中でも特に「自分自身」の評価が低かったのは「要領が良い」、「独創的である」、「才能がある」の 3 項目であり、いずれも能力に関する項目である。また、藤江はインポスター現象特性と「内向性の高さ」、「誠実性の高さ」、「神経症傾向の高さ」には相関があると述べているが、「おとなしい」、「礼儀正しい」、「こだわりが強い」の意味するところがほぼ同じであり、この 3 項目は「京大生をとらえた特徴」である。このことから回答にインポスター現象的な特徴が表れていることが分かる。他人から思われるよりも自己評価が低いこと（インポスター現象的な特性があること）自体が京大生の特徴の一つであるのかもしれない。

3 つ目は、学歴社会の構造において社会的な地位が保証されているからこそ、自身の所属集団の優位性（肯定的特徴）に自己アイデンティティを求めなかったという可能性である。集団間比較での内容であるが、Vleeming (1983) は地位を脅かされることのない安全な高地位の集団は低地位の集団と比べて、自集団に肯定的な社会的アイデンティティを求めないということを述べている。今回の研究では個人とその所属集団が研究対象であったために外集団を設定していないアンケート調査を行ったが、回答者の認識において「京大生」が他の集団を脅威と思わないほど高地位のものであると認識していたとすれば、自己の存在証明に必死になる必要がなく、「京大生」の優位な特徴を自己アイデンティティ化しなか

ったことにも説明がつくであろう。

これらの傾向の方が社会的アイデンティティ理論に基づく仮説よりも強く表れたため、仮説 2 とは逆の内容が支持されたのだと考えられる。

表 4-3：肯定的特徴における「非アイデンティティ化度」の男女比較

	男性	(SD)	(SE)		女性	(SD)	(SE)	t 値	p 値
肯定/非アイデンティティ化度	0.45	(0.72)	(0.05)	<	0.78	(0.72)	(0.06)	-4.48	0.00

4-4 仮説 3 の検証とその他属性について

3-5 では、学年が 1 つ上がるごとに「非同一視度」が 0.05 点小さくなるという結果が示され、学年が上がるごとに「京大生イメージ」と「自己イメージ」が同一視されるようになるという仮説 3 が支持された。学年が上がるにつれて同一視される度合いはかなり小さな値になってはいるが、前にも述べたように今回の調査では直接的に同一視具合を測るような質問を設定しないなかでの分析であったためであるかもしれない。何れにしても、長く在籍すればその分だけ京大生に染まっていくということが統計的に示されたということをもラトリアムの延長に勤しむ京大生には知っておいてもらいたい。

また、3-5 では女性の方が男性よりも「京大生イメージ」と「自己イメージ」を同一視しないことが示され、3-6 でも「自己イメージ」において男女に有意な回答差があり、女性の方が男性よりも「京大生ステレオタイプ」に対する「自己イメージ得点」が低いことが示された。これにはいくつかの要因が考えられる。まず一つには 4-3 でも少し述べたように女性の方が自己評価が低い傾向があるということである。岡田・小塩点・茂垣・脇田・並川（2015）も女性の方が男性よりもわずかではあるが自尊感情が低いということを述べている。このように自尊感情の性差によりこのような結果がでたとも考えられる。もう一つには、「京大生ステレオタイプ」そのものがジェンダー化された概念であるという可能性である。昔から女性よりも男性の比率の方が多く、現在でも京大生の男女比はおおよそ 3 対 1 であり（令和 2 年 5 月 1 日時点）、京大生のイメージが男性的なものになっていてもおかしくはない。以上のような理由から、女性の方が男性よりも「京大生イメージ」への「非同一視度」が大きくなることや、「京大生ステレオタイプ」に関する「自己イメー

ジ得点」が低くなるという結果が表れたのではないだろうか。

そして意外であったのが「京大生イメージ」にも「自己イメージ」にも「学部」による回答差が見られなかったということである。京都大学は学部ごとにその所属人数が大きく違い、文系と理系でも理系の方が圧倒的に人数が多い。そのため「学部」による回答差が少しはあると思っていたが、「京大生」という括りにおいては、文学部でも工学部でも、文系でも理系でも大差はないのであろう。

5 まとめ

以上この論文では「京大生らしさ」といわれるものを「京大生ステレオタイプ」として明確化し、京大生の「自己認識」に焦点を当てて分析をしてきた。その結果、「京大生イメージ」は「自己イメージ」より「京大生ステレオタイプ」が強く認識されるということや、「京大生ステレオタイプ」の“肯定的特徴”より“否定的特徴”の方がアイデンティティ化されるということ、学年が進むにつれて「京大生イメージ」と「自己イメージ」の同一視が進み、女性より男性の方が同一視する傾向があるということが分かった。

社会には無数の関係性が重なりあって存在する。今回はその中の1つである、「京大生」という集団と京大生の「個人」との関係性を「京大生らしさ」といわれるようなステレオタイプに着目してまとめただけであり、少し視点を変えれば別の集団や個人と比較できたり、比較対象が変われば「自己認識」も変化したりするなど、関係の分析にはまだまだ広がり考えられるであろう。

最後に、個人的な思いにはなってしまうが、自らがまさに4年間そうであった「京大生」の社会をたとえ一部だけでも卒業論文としてまとめられたことで、どうやらこの4年間のモラトリウムを締めくくれそうである。

6 参考文献

- 天野郁夫, 有馬敏行, 池田信一, 仙崎武, 1980, 『京都大学総合研究：その歴史・学生生活・就職先・入試ほか』日本リクルートセンター出版部, 42-45.
- 浅井亜紀子, 2011, 「大学の帰属意識に影響を与える諸要因とジャーゴンの役割 — 社会的アイデンティティ理論の有効性」 『桜美林論考. 言語文化研究』 2: 67-82.
- Clance, P. R., 1985, *The impostor phenomenon: Overcoming the fear that haunts your success*, Peachtree.
- , Imes, S. A., 1978, “The imposter phenomenon in high achieving women: Dynamics and therapeutic intervention,” *Psychotherapy: Theory, Research & Practice*, 15(3): 241-247.
- 平井美佳, 2000, 「『日本人らしさ』についてのステレオタイプ—『一般の日本人』と『自分自身』との差異」 『実験社会心理学研究 / 日本グループ・ダイナミックス学会 編』 39(2) : 103-113.
- Hogg, M. A., Dominic Abrams, 1988, “Social Identifications: A Social Psychology of Intergroup Relations and Group Process, Routlege. (=1995, 吉森護, 野村泰代訳 『社会的アイデンティティ理論—新しい社会心理学体系化のための一般理論』 北大路書房.)
- 藤江里衣子, 2009, 「インポスター現象研究の概観」『名古屋大学大学院教育発達学研究科紀要. 発達心理学』 56 : 29-38.
- 池田謙一, 唐沢穰, 工藤恵理子, 村本由紀子, 2010, 『社会心理学 (New Liberal Arts Selection)』, 有斐閣.

池上知子, 1997, 「大学生の社会的アイデンティティと大学ステレオタイプ」『日本教育心理学会総会発表論文集』 39 : 79.

———, 2001, 「学歴アイデンティティと内集団卑下化—学歴社会における社会的
ンティティ理論の検証」『愛知教育大学研究報告. 教育科学』 50 : 95 -103.

加賀美常美代, 横田雅弘, 坪井健, 藤和宏, 2012, 「多文化社会の偏見・差別—形成のメカ
ニズムと低減のための教育」, 明石書店.

柿本敏克, 1997, 「社会的アイデンティティ研究の概要」『実験社会心理学研究 / 日本グル
ープ・ダイナミックス学会 編』 37(1) : 97-108.

片桐雅義, 2002, 「事象間の関連判断のバイアスと錯誤相関」 『宇都宮大学国際学部論文
集』 13 : 1-11.

京都大学, 2020, 「京都大学概要 2020」([https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-
files/gaiyo2020_2nd.pdf](https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/gaiyo2020_2nd.pdf), 2020.12.30) .

Merton, R. K., 1949, *Social Theory and Social Structure*, Free Press. (=1961, 森東吾他
訳, 『社会理論と社会構造』 みすず書房: 207- 398.)

岡田涼, 小塩真司, 茂垣まどか, 脇田貴文, 並川勤, 2015, 「日本人における自尊感情の性
差に関するメタ分析」 『パーソナリティ研究』 24(1) : 49-60.

菅さやか, 唐沢穰, 2006, 「人物の属性表現にみられる社会的ステレオタイプの影響」『社会
心理学研究』 22 (2) : 180-188.

高田利武, 1995, 「自己認識方途としての社会的比較の位置-日本人大学生に見られる特徴」
『奈良大学紀要』 , 23, 259-270.

——, 2002, 「社会的比較による文化的自己観の内面化－横断資料に基づく発達の検討」
『教育心理学研究』50（4）：465-475.

Vleeming, R. G., 1983, “International Relations in a Simulated Society,” *Journal of Psychology*, 113(1): 81-87.

矢田部圭介, 山下玲子, 2012, 「アイデンティティと社会意識－私の中の社会——社会の中の私」 矢田部圭介・中西祐子・大屋幸恵・千田有紀・山下玲子・山寄哲哉・山本拓司・粉川一郎・荒木龍彦（編）『現代の社会学とメディア研究』3, 北樹出版.

（400 字詰め原稿用紙 49 枚相当）

「京大生らしさ」に関するアンケート

調査者 文学部社会学専修4回生 義村聡志

連絡先 yoshimura.satoshi.37z@st.kyoto-u.ac.jp

この調査は卒業論文のために行っています。この調査は京大生を対象とした調査ですので、京大生以外の方は回答をしないでください。データは匿名化したうえで部外秘として扱い、研究以外の目的には一切使用しませんのでご協力をお願いいたします。また、すでにこのアンケートに回答してくださった方は再び回答していただく必要はありません。

***必須**

1。 問1 性別 *

1つだけマークしてください。

- ☐ 1.男性
- ☐ 2.女性
- ☐ 3.その他
- ☐ 4.回答しない

2。 問2 学年 *

1つだけマークしてください。

- ☐ 1.1回生
- ☐ 2.2回生
- ☐ 3.3回生
- ☐ 4.4回生
- ☐ 5.5回生以上

3。 問3 学部 *

1つだけマークしてください。

☐ 1.総合人間学部

☐ 2.文学部

☐ 3.教育学部

☐ 4.法学部

☐ 5.経済学部

☐ 6.理学部

☐ 7.医学部

☐ 8.薬学部

☐ 9.工学部

☐ 10.農学部

☐ その他: _____

4. 問4「一般の京大生」を想定して、その特徴について以下の項目に教えてください。 *

1行につき1つだけマークしてください。

	あては まる	ややあて はまる	どちらで もない	あまりあてはま らない	あてはま らない
1.頭が良い	☐	☐	☐	☐	☐
2.人見知りである	☐	☐	☐	☐	☐
3.礼儀正しい	☐	☐	☐	☐	☐
4.ダサい	☐	☐	☐	☐	☐
5.冷静である	☐	☐	☐	☐	☐
6.気難しい	☐	☐	☐	☐	☐
7.裕福である	☐	☐	☐	☐	☐
8.個性的である	☐	☐	☐	☐	☐
9.プライドが高い	☐	☐	☐	☐	☐
10.要領が良い	☐	☐	☐	☐	☐
11.こだわりが強い	☐	☐	☐	☐	☐
12.マイペースである	☐	☐	☐	☐	☐
13.モテない	☐	☐	☐	☐	☐
14.独創的である	☐	☐	☐	☐	☐
15.几帳面である	☐	☐	☐	☐	☐
16.おとなしい	☐	☐	☐	☐	☐
17.理屈っぽい	☐	☐	☐	☐	☐
18.熱中するものがある	☐	☐	☐	☐	☐
19.自由である	☐	☐	☐	☐	☐
20.才能がある	☐	☐	☐	☐	☐
21.努力家である	☐	☐	☐	☐	☐

5. 問5「自分自身」を想定して、その特徴について以下の項目に教えてください。^{*}

1行につき1つだけマークしてください。

	あては まる	ややあて はまる	どちらで もない	あまりあてはま らない	あてはま らない
1.頭が良い	☐	☐	☐	☐	☐
2.人見知りである	☐	☐	☐	☐	☐
3.礼儀正しい	☐	☐	☐	☐	☐
4.ダサい	☐	☐	☐	☐	☐
5.冷静である	☐	☐	☐	☐	☐
6.気難しい	☐	☐	☐	☐	☐
7.裕福である	☐	☐	☐	☐	☐
8.個性的である	☐	☐	☐	☐	☐
9.プライドが高い	☐	☐	☐	☐	☐
10.要領が良い	☐	☐	☐	☐	☐
11.こだわりが強い	☐	☐	☐	☐	☐
12.マイペースである	☐	☐	☐	☐	☐
13.モテない	☐	☐	☐	☐	☐
14.独創的である	☐	☐	☐	☐	☐
15.几帳面である	☐	☐	☐	☐	☐
16.おとなしい	☐	☐	☐	☐	☐
17.理屈っぽい	☐	☐	☐	☐	☐
18.熱中するものがある	☐	☐	☐	☐	☐
19.自由である	☐	☐	☐	☐	☐
20.才能がある	☐	☐	☐	☐	☐
21.努力家である	☐	☐	☐	☐	☐

- 6。 問6「一般の京大生」について答える際に、誰を基にして想定しましたか？(複数選択可) *

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 1.自分自身
- ☐ 2.テレビに映る京大生
- ☐ 3.新聞で語られる京大生
- ☐ 4.YouTubeに映る京大生
- ☐ 5.人から伝え聞いた京大生
- ☐ 6.実際の京大生の友人
- ☐ 7.実際の京大生だが友人ではない人

その他: ☐ _____

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム